

第一章

『南回帰線』の主題はなにか？

(1) 年代的枠組み、『南回帰線』に後続する『南回帰線』

『南回帰線』（一九三九）の主題は単一ではありえず、複数の主題が絡みあい、それなりに複雑である。自伝的小説という枠組みからみれば、別途に言及することになるが、ヘンリー・ミラー（一八九一―一九八〇）が生涯を賭して書こうとした作品の覚書は一九二七年に作成された。この覚書は現存しており、二三ページのタイプ稿である。『南回帰線』の献辞は「彼女に」となっていて、「彼女」のモデルはジューン・イーディス・スミス（一九〇一―一九七九）であり、舞台に立とうとしてニューヨークのシアターギルド（一九一九年設立）に参加したときにジューン・E・マンスフィールドと名乗った。

ヘンリー・ミラーの自伝的小説の年代的枠組みは、一九二三年のジューンとの出会いから单身パリに移動した一九三〇年までの七年間に限定されていた。しかし、『南回帰線』ではおおむねダンスホ

ールでのジューンとの運命的出会いまでの出来事が集中的に描かれており、要するに、書き連ねたいことが増大したことを意味するのであって、ミラーの自伝的小説は、当初の構想を超えて長大になっていた。作家ロレンス・ダレル（一九一二年—一九〇）に宛てた手紙によれば、二十三ページの覚書のうちの二ページ半の内容が『南回帰線』に織り込まれたという。さらに執筆過程において、作者は自身の過去や遙かな未来にまで思いをはせていくので、年代的枠組みを意識しつつ、その枠組みを超えていこうとする。七年間という枠組みについて、ミラーは『北回帰線』において、「七年間、ぼくは昼夜をわかつた、たったひとつのことを思いながら動き回っていた——彼女のことを。彼女に対するぼくのように、自分の神にかくも忠実なキリスト者がいるとすれば、今日ぼくたちみなはイエス・キリストになっているだろう」と綴っているが、これは勢いにまかせて書かれた駄文ではなく、『南回帰線』の主題に直結する内容をはらむ一節である。

アナイス・ニン（一九〇七—七七）は、一九四〇年七月の日記のなかに、「ヘンリーは『南回帰線』の第二部（the second part）に数ページを書き加えていた」と書き込んでいる。アメリカ紀行を執筆するためにアメリカ一周旅行を敢行していたミラーは、一九四一年四月二十四日付けの、アナイス・ニン宛ての手紙のなかで当時の心境を以下のように述べている。

ぼくは毀誉褒貶を浴びるためにアメリカに滞在しているわけではありません。この旅行はアメリカでの生活に決着をつけさせて、外国のどこかで、こころ穩やかに将来の『南回帰線』（the future Capricorns）を書くためです。そのあとでロレンスに関する本を仕上げたら、もう書くこ

とがなく、引退です。

要するに、『南回帰線』が世に出たにもかかわらず、作者はさらに『南回帰線』を執筆するつもりでいた。『南回帰線』に書き連ねたいことが多々あり、一冊では収まらないと判断していたミラーは、数巻のさらなる『南回帰線』を執筆するつもりでいたのである。さらに一九四二年二月付けの、アメリカ合衆国の検閲官ハンティントン・ケアンズ（一九〇四―八五）に宛てた手紙のなかに、「いま『南回帰線』の第二巻に没頭していて、勇み立っています」という一文が出てくる。当時のミラーは『セクサス』（一九四九）の執筆を開始していた。しかし、『セクサス』が『南回帰線』の第二巻なのではなく、「薔薇色の十字架刑」という総題が付されている『セクサス』、『プレクサス』（一九五二）、『ネクサス』（一九五九）の三部作が『南回帰線』の第二巻である。友人エミール・シュネロック（一八九一―一九五九）宛ての、一九三八年十一月四日付けの書簡において、『南回帰線』の第一巻では、きみはほとんど登場していませんが、第二巻（『薔薇色の十字架』）ではずっと大きく姿を現すでしょう。第一巻は、いわば長い序文であって、作品全体の柱もしくは正門とみなすべきなのです」と述べている。『南回帰線』の主題を論ずるとき、狭義の『南回帰線』にとどまらず、「薔薇色の十字架刑」と称される広義の『南回帰線』も対象にされることになる。ミラーの主題には持続性、一貫性、普遍性が存するとみられるからである。

(2)『南回歸線』の第四パラグラフの末尾——「自己に向かう内面的な冒険」という主題

『南回歸線』と三部作「薔薇色の十字架刑」を貫通している主題はなにか？ この問いについて思いめぐらすとき、浮上するのは『南回歸線』の第四パラグラフの末尾に出てくる一節であって、以下に引く。

ぼくも含めて、恥ずべき臆病者ばかりだ。なぜなら、偉大な冒険とはただひとつ、自己(self)に向かう内面的な冒険しかないからだ。そしてそこでは、時も、空間も、また行為すらも、重要性をもたないのだ。

ミラーが「自己に向かう内面的な冒険」に踏み出すとき、彼の自伝的小説群にはある種の揺らぎが生ずる。自伝的小説は、「時」と「空間」と「行為」が不可欠の構成要素であり、そうした要素によって成立するからである。ミラーにおける自己探求の物語は、いわば重層的な作品群の深層において進行しているのであって、読者が作品の表層だけに目を向ければ、ミラーは性の作家というレッテルを貼られることになる。

ミラーはなぜ、「ぼくも含めて、恥ずべき臆病者ばかりだ」と発言するのか。要するに、二十世紀の詩人や作家のだれもが自身を十九世紀のランボーやバルザックと肩を並べようと奮闘しているようには思われないからであった。「自己に向かう内面的な冒険」の途についたミラーは、文学界の巨匠

たちの作品を耽読するときに、巨匠たちにおける自己の探求を果敢に追っていき、巨匠たちとの関係においておのれ自身の自己を検証しようとすることもあった。それこそがミラーのいう「偉大な冒険」であった。ミラーの対象となる巨匠たちとは、D・H・ロレンス、アルチュール・ランボー（一八五四―九一）、ジョン・クーパー・ポウイス（一八七二―一九六三）、ジェラルド・ド・ネルヴアル（一八〇八―五五）、ニーチェ（一八四四―一九〇〇）などであり、『南回帰線』を脱稿すると、オノレ・ド・バルザック（一七七九―一八五〇）の『ルイ・ランベール』（一八三二）に触発されたミラーは、バルザックにおける自己がいかに描かれているかを解読しつつ、自身が何者であるかを遠まわしに主張しようとした。

（3）ヘンリー・ミラーにおけるD・H・ロレンス——聖霊はなにを意味するのか？

一九三三年、ミラーは『北回帰線』の改稿に着手しながら、ロレンスの諸作品をすさまじい勢いで読み継いでいった。同年五月七日付けの、アナイス・ニンに宛てた書簡において、ロレンスの難解なエッセイ「王冠」(The Crown)を読了したと伝えつつ、一〇〇ページほどの「王冠」から受けた衝撃を以下のように述べている。

このエッセイは小説『虹』と同じく一九一五年に執筆されました。予言的であり、人類に対する判決になっています。言語は比類するものがなく——聖書の最良の部分を想起させます。思想は、ぼくの意見としては、キリストのことばのいずれよりもすぐれています。[……]難解な箇

所がここかしこに見られますが、不明瞭ではありません。この作品が世界を激しく揺さぶったとしてもおかしくなかったことでしょう。「……」「王冠」を無視するのは犯罪も同然です。ルターの宣告と同等の重要性があります。あんなに若いころに——三十歳のときに書かれたとは驚嘆すべきことです。深遠な、感動的で美しい、迫りくる時代の聖書のごときものです。とにかく、ぼくたちはもう少しでロレンスを理解できるところまで到達したのです。しかし、なんぴとも「王冠」の意味を吸い上げるまでは彼を理解することはできません。

「王冠」が「人類に対する判決」になっているというのは、このエッセイが第一次世界大戦の勃発に対するロレンスの反応である、とミラーが読み解いたからであって、ロレンスにとって世界は一九一四年の夏に決定的に激変したのである。ニーチェの使徒であろうとするミラーは、「王冠」を読み、世界大戦の勃発が歴史を両断するだけの意味をはらんでいると感じたはずである。イエス・キリストの登場は結果として歴史を両断し、人間の歴史はキリスト以前とキリスト以後に二分された。しかし、ミラーは「王冠」のうちにキリストの時代の終焉というロレンスのひそかな主張を嗅ぎ取り、「王冠」が「迫りくる時代の聖書のごときもの」であり、新たに歴史の両断を意図した作品だと断定したのである。

二日後の五月九日の返信において、『私のD・H・ロレンス論』の著者であるアナイス・ニンは、『「王冠」についての熱烈なお手紙をいま落掌しました。『王冠』はあなたに差し上げることにします。あなたのものです。あなたはあの作品の意味を発見したのですから。わたしは『王冠』からなにも得ることができなかったのです。あなたがいかに深く、広汎に読み進まれたかを語っています。わたし

はひどく興奮しています」とミラーの手紙に反応した。

興奮状態が持続していたミラーは、五月十八日に友人エミール・シュネロックに宛てて七ページの手紙を書き、「ロレンスのせいで恥ずかしい思いをしています。恥ずかしい、とても恥ずかしい思いをしています。彼の鎮められない精神、彼の完全性、遍在性、生氣。死の床についていたロレンスは、生きている人間の大多数が彼らなりに恍惚状態にあるときよりも生き生きしていました」と述べてから、ロレンスの絵画の複製を眺める機会があったことを伝えつつ、「新しい一日をはじめするために、わが知られざる精神に潜り込みます。聖霊、ぼくの内面の服従を要求する、生きている手がかりをふたたび主張するために」とロレンスから受けた衝撃を率直に語っている。

ロレンスが南フランスのバンドールで没して二日後の一九三〇年三月四日に、ミラーはパリに着した。パリではロレンスへの関心が高まっていた。一九三二年春、アナイス・ニンの『私のD・H・ロレンス論』が世に出た。『チャタレー夫人の恋人』のパリ版を出版したエドワード・タイタス（一八八八—一九四五）によって上梓されたこともあって、女性によるロレンス論として注目された。『北回帰線』のマーローのモデルになったサミュエル・パトナム（一八九二—一九五〇）宛ての書簡によれば、ミラーはアナイス・ニンのロレンス論のタイプ稿を、アナイス・ニンに対面する以前の一九三一年二月下旬に読み、高く評価していた。つまり、アナイス・ニンはロレンス論の執筆を一九三〇年に開始していたことになる。ミラーは一九三三年五月七日付けの手紙において、「ロレンスは来る百年間は理解されないだろう」という確信においてアナイス・ニンに同意している。アメリカ議会図書館に『北回帰線』のオリジナル草稿の断片と称される一〇八ページほどの錯雑としたタイプ稿が収蔵されていて、ここかしこにロレンスについての言及が散見される。しかし、現在の『北回帰